八　闘いの日々

AFLのスカップ

日本の労働運動史上、もっとも古くから組織され、戦闘的に歴史をきりひらいてきたのは、印刷工であった。早くは、一八八四年（明治二一年）の秀英舎の組合にはじまって、九九年の活版工組合、それをついだ一九〇〇年の誠友会そして、一九〇七年の欧友会へと連なる。その伝統と基盤をもとに――大正期労働運動を語るとき欠くことのできない――信友会が生まれたのは、一九一七年（大正六年）四月であった。この信友会は、二〇年に発足した新聞印刷工組合正進会と共に、アナキズム運動の誠実な担い手となった数えきれないほど多くのアナキストを生みだした。

そしてこの印刷工たちは、当時進められつつあったアナ系自由連合派労働組合の全国連合の先頭をきって、一九二三年六月、全国印刷工連合会を結成した。ついで信友会、正進会が合同して東京印刷工組合となり、それ以降関東労働組合自由連合会および全国自連や全国自協の中心として、アナ系の労組が壊滅する一九三八年（昭和一三年）まで、闘いの中心となったのである。

山鹿が信友会で活動しだした年月はつまびらかでないが、おそらく当初から、接触があったにちがいない。彼をアナキズムに手引きした原田新太郎は、信友会創立後まもなく夭折したが、その発足に貢献した功労者である。しかし、信友会が大きく発展した一九一九～二一年にかけて、山鹿はほとんど京都にいて、入獄中であった。それゆえ、正式な活動は、大正一一年以降ということになるだろうか。山鹿が震災後つとめだしたアドバタイザー社には、水沼辰夫（信友会創立時の副幹事長）などの有力な活動家がともに働いていた。これら信友会の闘士連は、アドバタイザーの経営者にとってやりきれなくうるさいものであったに相違ない。

――社長のフライヤーは、日頃から口ぐせのように「信友会所属の者は、トラブルメーカーだ。いつも会社を困らせることだけを考えている」とコボしていた。

そんなある日、みんなが昼食のために外出して帰社すると、ライノタイプの前に外国人が立ち、仕事をやっていて、自分らの居場所がない。早速、社長室におしかけて問いただすと、あべこべに待っていたとばかり、全員クビを申し渡された。これは、かねて信友会会員の排除を考えていた社長がひそかにアメリカから二〇人のライノ工を呼び寄せ、彼らを近くの帝国ホテルに泊まらせてじっと機会を待っていたのだった。このスト破りの外人たちは、AFL（アメリカ労働者連盟）の会員で、あらかじめ社長から話を聞いているとみえ、みんながライノの前へ近づこうとすると、スパナや鉄棒を振り回して寄せつけない。

私は、すぐ連中の人名、特徴、手首にイレズミをした奴などひとりひとりを調べて、サンフランシスコのIWW（世界産業労働者）へ急報を送った。八太舟三に英訳してもらったその手紙の全

文は直ちにＩＷＷの機関紙『インダストリアル・ワーカー』に載せられた。「ＡＦＬ・日本でスト破り（スカップ）」と、第一頁全段ぬきの大見出しで、たちまち全米労働者にセンセーションをまき起こした。ＡＦＬは慌てて調査すると釈明し、スト破りたちは、本国からまいこむ抗議に意気消沈し、一人去り、二人去って、一週間もたつとほとんど出てこなくなった。

また、その時、信友会や自連系労組からかけつけたモサ連が、応援に立ち上がったのはもちろんである。新聞の組版は台からひきずり落され、めちゃめちゃにされた。スト破りどもは写真版や活字を投げられるやらで、逃げだしていった。新聞は数日間停止し、会社はとうとう旧状復帰を認めねばならなくなった。外人連中は、老人の職長ペーン一人を残していなくなった。このペーンは、ユニオンメンと言ったら、みんな仲間だと思っている位のお人好しで、それほどの悪人でなかった。のち自連事務所へ遊びに来たりして、ストでの同志の闘いを話してやると、涙を流して感激するほどの感情家でもあった。

第六回東京メーデー

山鹿は、生涯を通じて、派手ないかにも活動家的、といった動きを自ら買ってやることをほとんどしなかった人である。しかしその彼が、忘れがたい光栄として強く記憶していることの一つは、第六回メーデーの副司会者になったことであった。その日彼は二万人の労働者の前に立ち、またデモの先頭を黒旗をなびかせて歩いたのであった。その当時、メーデーは各派の労働組合代表が準備委員会をつくることになっていた。主催者は話合いで決めるときもあったが、クジ引きですることが習慣だ

った。一九二五年（大正一四年）のメーデーの主催者はクジ引きで自連系労組ときまり、そして司会者には、機械工の北林カズエ、副司会者に山鹿が選出されたのである。

――芝公園の会場へ行って、副司会者という白布を肩にかけると、すぐ警官がやって来て、「山鹿君、今日は一世一代なんだから頼むぞ。自重して黒色を出してくれるなョ」といかにも弱ったツラで言う。開会が宣言され、代表演説がはじまると、次々と仲間が動議を申し込む。私が係となってそれを受け付けて呼び出す。会場のどよめきが波のように次第に盛りあがってきた。だがその途中で会場の一隅で騒ぎが起こった。短刀を振り回している反動が一人つまみ出されたのだ。

行進にうつると、新選組とかいう制服巡査がアゴヒモをかけ、四人一列毎に割り込む。さらに隊列の前後に、自動車に乗った特高や警部がつき、指さしたり声を出して、注意人物を引き抜く。日比谷公園脇まで来ると、待ちかまえた警官が一団となって、片っ端から検束しかかった。

「やるならやってみろ。このメーデーが暴動になったら、貴様らの責任だぞ」と私が怒鳴ると、それに気圧されて一瞬道が開いたその隙に、どおっと通過した。そんなことを数回くり返しながら、須田町から上野へと曲った。山下まで来ると、高い木の上に一人の男が登っていて、ぱらりと大きい白布を下げた。そこには「第六回メーデー万歳」と大書してある。労働運動社の川口慶助だった。それをみてわあっと警官隊が走り寄り、襲いかかってきた。そこから博物館前までいって解散するのだが、その間でめぼしい同志のほとんどは引き抜かれてしまった。

私はそれでもすばやく逃げのびることができた。追手をまき山裏の方へでると、そこで近藤憲二に出会った。二人ともどうも腹の虫がおさまらない。「ちょっと警視総監に、挨拶しよう」「う

んよかろう」ということになった。

夜になるのを待ち、丸の内の総監官舎前へ行った。報知新聞社の前から、石を一、二の三で投げると走り出した。背後で、見事ガラスの割れる音がした。ザマをみろ！　その帰り道、三菱銀行の前に来ると、「おいやろう」「うん」と私達はまたうなずきあった。近憲は見張り役になり、私は持参のクレヨンで太い花崗岩の柱に、「貨幣廃止・無政府共産」と、幾つも落書きすると、大急ぎで立ち去った。翌日、昼休みの散歩がてら見にいくと、ガソリンで拭いたのだろう、どの柱にもはっきりくろぐろと広がった痕が残っていた。

マラテスタの軟禁

メーデーの後始末がすんでまもなくのこと、山鹿宛に著名な世界的アナキスト、エンリコ・マラテスタがムッソリーニによって軟禁された、というアピールが来た。当時、新聞はイタリーでは政治結社を禁止し、厳しく弾圧をしていると報道していた。

――私はすぐ抗議文を作り、それを百瀬晋にイタリー語訳してもらうと、自連系の若い労働者と共に、霞ケ関のイタリー大使館へ押しかけて行った。書記官が出てきて、やりとりとなった。抗議文を読んでみろと言うと、すらすら読んでいたから、百瀬の独習イタリー語も満更ではなかったのだろう。そこへ日本人らしいのがやってきて、自連の旗を見ると、「君らはマラテスタのことできたのか」と話も聞かずに言うので驚ろいていると、「大丈夫。マラテスタはすぐ解放される。書記官は、この抗議が日本の外務省を通じてでなければ受け付けられないと言っている。しかし

折角もって来たのだから、ぼくがイタリーへ送らせるから……」と、いやにおとなしく出る。書記官と話すイタリー語もうまいので、すぐこいつがムッソリーニの親友と自称する黒シャツ党の親玉下位春吉と察した。そこで、「俺たちはイタリー大使館の奴等と決闘する気できたのだ。外へでろ」と挑んだが、馬鹿に低姿勢でどうしても喧嘩にならなかった。

マラテスタの軟禁に対し、信友会はじめ自連系組合はイタリー製品のボイコットを決議し、機関紙に発表した。しかし、当時イタリー製品といえば、高級品のボルサリノ製帽子とブドー酒、その他大きいものでは、さきに陸軍が買入れた飛行船雄飛号位しか知らず、結局ボイコットするにも形にならなかった。

『日・エス・支・英会話と辞書』の刊行

山鹿の日々は、職場と組合、労働と闘争の間を往来しながら、一方ではこつこつとエスペラントの仕事をも進めていた。その頃、各国エスペランチストの留学生や関係者がしばしば来日したが、その人達は、大抵来日の第一歩にまず山鹿を訪ねてくるのであった。また、とくに中国と日本の間でのひそかな往来が、同志間で行われるようにもなっていた。エス語は、もちろんそんな時大きく役立てられたが、しかし、相互がエスペランチストである場合だけに限定されるという難点もあった。山鹿はそのたびに、エス語を知らないものにも、簡単にエスペラントをマスターさせるための第一歩となるものがあれば、と痛感した。

山鹿はかって自分の必要から、全く個人的な日・エス・支・英会話集のノートを作ったことがあっ

た。そこでそれをもとに、英語をも加えて実用性をもった会話の手引き書を、作ろうと思いたったのである。そして、当時中国から運動の連絡係として早大に留学していた同志でありエスペランチストでもあった衛恵林が、中国語関係を受け持って校訂してくれることになった。

――一九二五年九月、僕は『日・エス・支・英会話と辞書』と題する小著を、早大留学中の中国の同志衛恵林の助力によって岸上大道社から出した。一一六頁定価一円だった。序文は、恵君と小坂狷二が書いてくれた。小坂氏は外遊まぎわの多忙のなかをエス文で次の意味のことを寄せた。

「幾千年の、頑固な障壁がそびえ立って、国民と国民を分割している。……似而非憂国者共の憎悪と、軽べつすべき利己主義と、地上の伝統と世襲の無智の予断がそれである。……エスペラントの学習書は単に言語の案内書であってはならない。同時にまた学習者のために人類のユートピアへの案内者であるべきだ。……我が愛するこの本の著者山鹿は、久しくその意味での私の同志である。今われらの緑の旗は君を呼ぶ。打ちこわされはじめた障壁の響きは始まった。きずなを断ちきれ。今こそのろわれたくびきを断て。防塁と国境を越えて進め。」三〇代頃の小坂狷二は、このようなはげしい意気込みをエスペラントに寄せていたのである。

今からみれば片々たるこの小辞書は、当時来日または渡支した同志の手引きとして、どれほど実用され役立ったかは、計り知れないものがあった。

高橋光吉の渡支

渡支といえば、一九二五年（大正一四年）の初秋、機械技工組合にいる高橋光吉が、山鹿を訪ねてき

た。しばらく中国へいって、うるさい警察の眼をくらましたいという。山鹿はそこで、上海仏租界で病院を開業している医者鄧夢仙あて紹介状を書き、渡航の心得などを細々と教えて送り出した。

高橋は、はじめ松田十九二と同行の筈だったが、結局一人で神戸から旅立っていった。途中長崎に数時間の寄港の時、乗り込んできた特高の眼も巧みにくぐり、無事上海に着くことができた。港から人力車で一時間あまりの所に鄧夢仙の家があった。すでに山鹿からの連絡で、夢仙は待っていた。高橋はその二階の一室にいた林紹雄と同居することにきまった。林は一九二二年、京都で山鹿に中国再脱出を語った佐野一郎の中国名で、高橋より五、六歳年長であった。高橋は上海滞在中は、ほとんど彼の世話になった。二、三日後には支那服を与えられ、高稚（コウチ）シャンという高橋の中国名もきまり、中国での生活がはじまった。

夢仙は四川省の人で、後、昭和初年に国民党に連行されて殺されたらしく、行方不明になったが、その頃日本から出かけた者は、大杉でも岩佐でもみんな世話になったかけがえのない同志であった。彼は、日本の千葉医大の出で、日本語は達者に使いこなした。家族はてん足の第一夫人と、日本人の第二夫人、長女が十歳、長男が七歳位、その子が日本語も中国語も話せて、通訳をやってくれた。それに阿片中毒の叔父と、五〇歳位の女中の六人暮しで、看護婦は置いていなかった。鄧の華光医院はたいして流行っていないようで、患者もあまりみかけなかった。それに絶えずいろんな人間が出入りし、居候が三人もいて、よく生活がもつものだと感心するほどであった。

その頃しょっちゅう鄧の所へやって来る中国の同志に、二人の学生がいた。一人は毛一波といい台湾出身で、日本人そっくりの顔をしたおとなしい性格だった。もう一人はするどい目つきで、一見し

てただ者ならぬ感じのする李帯甘（リ・ペイ・カン）という地主の息子だった。彼はすでに、新聞やパンフに健筆をふるっていたが、彼が後に著名な作家となった巴金である。（バクーニンの巴とクロポトキンの金をとったペンネームで、のち相互扶助論の中国訳など多くのアナキズム文献を出した。）

何となくぶらぶらして、食客生活をしているうちにその年は暮れ、一九二六年一月元旦、高橋と林は仏租界内のカトリック教会へ、反宗教とアナキズムを訴えたビラを撒きに行った。ビラは、かねてから用意してあったもので、表に中国語、裏にフランス語で印刷してあった。（日本のアナキズム運動は、反宗教運動としてはあまり行われないが、中国では無政府主義を〈三無主義〉と異名するように、法律、道徳、宗教の三つを否定するものとしての特色をもっている。）圧倒されるほど壮厳な感じを与える豪華な大伽藍天井に張りつめたステンドグラスの教会にしのび込むと、中ではオルガンがなり、すでに礼拝が進行中である。階上に上がった二人は二カ所のドアーから一勢にビラを撒き散した。駆けつけた警官の目を林はたくみにのがれたが、高橋は捕えられた。

高橋が連行された仏租界警察の留置場は、大きな風呂屋の流し場といった感じで腰かけひとつない殺風景なコンクリート部屋だった。そこへ二日ばかり放り込まれた後、日本の領事館警察へ引き渡された。日本領事館の留置場は六間四方ぐらいの部屋の真ん中に造られた鉄の檻で、同房者が三人入っていた。高橋が全くシッポを摑ませるような返答をしないので、放りこまれたままほとんど取調べがなかった。ある日、上海へ来て以来の立廻り先きを調べるために、人力車で連れ出された。あっちだこっちだと、いい加減に館員をふりまわして帰ってきたが、外地であったからこそそんなことで済んだのであって、「これが内地なら、家宅侵入だけで一辺にやられる」と、高橋は思った。二九日目に

何ということもなく釈放されたが、尾行をまくために小半日がかりで見当違いの所を歩きまわり、ようやく夢仙宅につくと、みんなが総出で大歓迎してくれた。

しかし、そのまま夢仙宅に居るのはまずいということになり、林と共に一時、別の同志の所に身を隠した。とはいっても二人は、様子をみては夢仙宅に出入りしつつ一カ月ほどが過ぎた。そのうちに黒色青年連盟（黒連）が結成され全国労働組合自由連合会（自連）が生まれた、という話を聞いた高橋が、ひそかに帰国の途についたのは三月頃のことであった。

命名・山鹿大次郎

一九二五年（大正一四年）九月一〇日、福田大将狙撃事件とギロチン社事件の判決がおり、古田大次郎は死刑、和田久太郎は無期、倉地啓司は一二年、新谷与一郎は五年と決まった。同月二〇日、和田は護送されて秋田へ送られていった。そして一〇月一五日、古田大次郎は死刑を執行された。

布施弁護士の知らせで、山鹿たちが遺体を引き取りにかけつけたのは一五日も夕方であった。その夜が通夜で、古田の棺は菊の花や附近から取ってきたススキや野の花で飾られ、薄暗い電灯の下に、ひっそりと静まっていた。山鹿も、その通夜の灯の下に照らし出されて、みんなと一緒に座っていた。その一週間前の一〇月九日に山鹿の妻ミカは、男の子を出産していた。長女アイノが生まれてから三年目である。自分の後をつぐ男の子がほしいと願っていた山鹿にとって、それは何よりも大きな喜びであった。古田の死と男の子の出生。山鹿はその子が古田の生まれかわりであるように思われた。彼はその嬰児の名前を古田にあやかり、大次郎と付けようと考えた。山鹿大次郎！　こうしてそ

の日から、山鹿にとって大次郎は、自分の子供であると共に、やがて共に働き共に活動をする未来の同志になった。

黒連と自連

一九二五年（大正一五年）二月、政府は普通選挙法を議会に上程し、続いて治安維持法案を提出した。それは飴のごとく見える前者と抱き合わせて、弾圧のための鞭を用意するものに外ならなかった。治安維持法について内務大臣若槻は、「無政府主義者、共産主義者を対象とするのみのもの」と弁明したが、第一条に「国体もしくは政体を変革し、または私有財産制度を否認する目的を以て結社を組織し、あるいは加入したものは、一〇年以下の懲役または禁固に処す」とある所からみれば、それは政府の解釈次第で全てをその条文にかこつけて、ひっかけられるものであった。

事実、アナキストたちが、当時口をきわめて主張したごとく、普選が何ら人民にとって甘い飴とはならず、治安維持法の鞭のみが行使されることになったことは、その後の歴史がはっきり証明するところである。もちろん世論は、治安維持法案をきわめて反動的な立法として、世をあげて反対した。全国の労働組合および諸団体はこぞって反対運動に立ちあがり、東京では二月一一日、大阪では二月一五日を中心に大示威運動を展開した。しかし、そのような反対にもかかわらず三月に法案は衆院で可決され、四月二二日の官報で公布されてしまったのである。この二つの抱き合わせ法案の成立によって、総同盟のみならず、かつて自連系に属した中立組合の右傾化は一そう顕著になってきた。また普選実施時期が近づくと共に、世をあげて普選に期待し、無産政党を樹立してそれに備えようとする

動きが活発となってきた。それと対照的に、アナ系の運動が次第に状況から孤立していく趨勢は、とどめようがなかった。

普選の実施を前に、かねて日本農民組合の提唱で進められていた農民労働党の結成大会が、同年一二月一日に開かれることになった。もちろん、アナキスト諸団体がこの動きを座視しているわけではなかった。それは人民を瞞着し、議会主義幻想をふりまくものであるとして、その日大挙して会場に押しかけた。檄文を配布し、その会の打ち壊しをはかったのであった。

この日の共同行動に結集したアナキスト諸団体は、これが契機となって相互の交流が進み、緊密な連帯が生まれてきた。その中から全アナキストの結集組織を作れ、という声が高まってきたのである。こうして、東京を中心とする一七の団体組織と、東京印刷工組合ほか労組有志加盟の「黒色青年連盟」が創立されることになった。それは、今まで各団体から待望されながらも、未だ実現し得なかったアナキスト連合組織の出現であった。

――黒色青年連盟（黒連）は、発会記念をかねて一九二六年一月三一日、芝の協調会館で第一回演説会を開催した。だがそれは度を越した官憲の干渉、弁士中止の連発のあげく、遂に解散を命令されたことから、忿懣やる方ない参加者が散会した後、一団の流れとなって「街頭へ、銀座へ」の叫びをあげて走り出した。慌てて阻止にかかる警官隊とぶつかりながら、銀座へとくりこんでいった。「革命だ、革命だ」と連呼しつつ、勢いの赴くまま、黒旗の先端で商店のガラスを軒なみに破壊してまわった。これがいわゆる銀座事件として、黒連の名を発足早々世に宣伝することになった。

この黒連の成立に続いて「全国労働組合自由連合会」（自連）が結成された。翌年の一九二六年（大正一五年）六月二四日、関東、関西、中国、広島の四地方自由連合会二三組合と、北海道二組合の代議員四〇〇名を集め、創立大会が浅草統一閣で開催された。これは総同盟、共産系がすでにその中央集権的統一組織を作りあげていたのに対置して、アナ系がはじめて全国組織としての自由連合を、ともかく実現したことにおいて、きわめて注目すべき結実であったといえる。

黒連は機関紙『黒色青年』を二六年四月から出し始めた。遅れて全国自連もまた月刊で『自由連合新聞』を発行して、全国的な情報と連絡の充実をはかった。

その頃、自連の事務所は木挽町にあり、山鹿は毎晩顔を出しては、立ち寄る労働者を対象にエスペラント講習会を開いた。（その講習生の中から生まれた東京印刷工組合の島津末二郎、芝浦労働組合の安井義雄らは、後に“La Anarkisto”を刊行するなどの活動をはじめることになった。）

――自連の事務所は――銀座四丁目の東を新橋まで三〇間堀の川があって、三原橋が架かり築地へと通っていた――今の昭和通りを左へ曲るとすぐ、右側の家について左へ入る袋小路二、三軒だけの家並の奥へひっこんだ二階家で、入口に全国労働組合自由連合会の看板が掛かっていた。

階下は、まだ独身であった布留川桂さんの住まいで、彼の母（村木源次郎の妻で延島英一の義母）と一緒に住んでいた。ここは裏通りへ抜けられないので、スパイをまくのに不便だったが、二階の二室ぶっ通した広間には詰めると三〇人位は座れるという利点があった。機関紙『自由連合新聞』は延島と和田栄太郎が主に編集していた。和田は夫婦で小石川駒込にある東京印刷工組合（東印）の事務所に住んでいたが、毎日のように来て連絡していた。また、自連事務所には、毎夕組

合員が何人も遊びに来ていて、どこかに何かがあればすぐ応援に出動できる態勢であった。何もないときは、夜間エスペラント講習をやった。

第五次労働運動

第四次『労働運動』は、『黒色青年』『自由連合新聞』の発刊によって、その役割を終り、一九二六年七月（大正一五年）一八号で廃刊した。しかし半年後の二七年一月一日、こんどは雑誌型A五版四八頁の第五次『労働運動』が創刊されることになった。同人は、近藤憲二、山鹿泰治、水沼辰夫、和田栄太郎、古川時雄で、その他、石川三四郎、岩佐作太郎、八太舟三が毎号のように論文を執筆した。また新居格、木下茂、能智修弥、李石曽、毛一波、小池英三、武良二、布施辰治、獄中から和田久などが寄稿した。

この第五次『労働運動』では、とくに山鹿の精力的な働きが顕著であった。例えば、第一号では「世界の運動」――以後毎号連載で国際労働者協会通報をもとに、TLES（全世界無国家主義者エスペラント連盟）からの会報によって、たんねんに記事をまとめた内容――六頁分のほか、エスペラント講座（毎号連載）四頁を彼は受け持っている。この『労働運動』は、山鹿の渡支中第一〇号で休刊になってしまったが、当時の山鹿は、エスペラントとアナキズムの一体化をこのように具体化しながら、日本の運動をインターナショナルな場所へと導く、大きな先達の役割を果しつつあったのである。

汎太平洋労働組合会議の紛議

一九二七年（昭和二年）三月、汎太平洋労働組合会議が開催されるというニュースが山鹿のもとへ入った。この会議は、はじめ濠州ニューサウスウエルズ労働組合会議の主催で、シドニーで開かれる筈であったが、それが変更され、広東で五月一日から開かれることと決った。

山鹿は、中国アナ系同志と接触し、その提携をもふくめた極東労働組合インターナショナルの実現を考えていたので、この企画に大きな関心を抱いていた。また、この会議に、各国の各種各派の労働組合が参加する以上、全国自連もまた代表を送り込む必要があると判断した。彼はこのことを関東労働組合自由連合会（関東自連）に提案して賛成を得た。四月上旬、山鹿の家でその小委員会が開かれ全国自連も承認することとなった。そこで代表に、歌川伸（江東自由労組）、水沼熊、松本親敏（東京一般労働）大塚貞三郎（東印）の四名を選び、正式に派遣する運びになった。

一行は四月下旬、ひそかに警察の眼をくらまして出発し、無事広東に到着した。ところが広東は内戦直後の混乱で準備がほとんど何もできておらず、開催場所も共産党勢力の中心地、漢口に変更となっていた。中国総工会が、上海経由で漢口へ連れていくということであったが、開催事情が当初の趣旨とだいぶん違っているようなので、大塚は事情報告のため日本へ帰り、水沼もまた上海から引き返した。結局、歌川と松本の二人が漢口へ赴き、会議に参加することになった。

しかしその会議は、始めから大平洋地域の労働組合を、ボル系組織としてまとめあげる意図を露骨に打ち出したものであった。日本からは、日本労働組合評議会の山本懸蔵らがすでに到着していて、

全国自連は労働者の統一を破壊する分裂組織である、といった報告を日本代表として述べるといったように、冒頭から前途多難を思わせるものであった。

――この汎大平洋労働組合会議への代表送り出しの提案責任者として私は、旅費のカンパや連絡などに、連日駆け回った。またその為に、貧者の一灯として、昔斎藤兼二郎老から貰って大切に所蔵していた幸徳秋水の肉筆短冊（年頭所感の漢詩）を売却したりした。

参加はロシア、オーストリア、日本、中国、朝鮮、インドなどであり、イギリスからはトム・マンが出席した。議事はすべて共産党のお膳立てで進められ、また参加者のほとんどがボルであった。自連から出した提案は、サッコ・バンゼッチ釈放要求と被圧迫民族解放要求だけが共通の議題となっただけで、結局その会議は、当初の意図は全く消滅し、ソ連共産党の強引な乗っ取りと介入によって、一部始終彼らの宣伝道具に使われただけにすぎなかった。

その結果、そんな会議に代表を派遣した自連の動きそのものを、事情不明の内部の組合員から批判する声が出てきた。とくに黒連はその頃より、アナルコサンジカリズムを純正アナキズムの立場からボル的傾向として非難しはじめていたが、この汎大平洋労働組合会議問題をとらえてより厳しく攻撃を加えてきた。二七年九月号『黒色青年』は、汎大平洋労働組合会議に出席した代表の一人が帰ってきた当時、昵懇の人々に対して会議の真相を語った「太平洋会議はとやかくの論はあるが、その経済綱領の如きは、大体において承認できるから、軽い意味において支持する」の言をとらえて、彼ら弁証法的似非アナキストは、東京印刷工組合内の改良的サンジカリスト延島、渡辺、和田等と策応して、自由連合派の組合協議の席上にその代表をして偽りの報告をさせたとし、全国自連組織のなかか

らサンジカリストを叩き出せ、と強調した。

――私のはじめの思惑とちがい、ことの結果がこんな不首尾だったので、自連編集のコンビ、延島と和田栄もその責任を迫られた。私も事務所への出入りがしにくくなり、エスペラント講習会も中断してしまった。

このことを発端として、純正アナ派のサンジカリスト攻撃は徹底的なものとなり、両者の拮抗は回復できないまでに拡大されていった。そしてその年一一月一九、二〇日、東京浅草で開かれた第二回全国自連大会は、不純分子をふくむ大阪合成労組の除名問題にからんで紛糾、流会となったのである。さらに二八年（昭和三年）三月一七、一八日、東京本郷で行われた続行大会においては綱領問題で混乱し、険悪な空気のなかで東京自由労組、東京食糧労組、東京一般江東支部（高橋光吉、江西一三等）南葛支部（山本勘助等）が一斉退場するという事態を生んで、遂に分裂したのである。そして脱退組はのちに、二九年（昭和四年）六月「日本労働組合自由連合協議会」（自協）を設立することになるのである。

サッコ・バンゼッチ救援のために

一九二七年八月、アメリカのアナキスト、サッコとバンゼッチ救援運動が、その処刑を目前にして激しく展開された。サッコとバンゼッチは、イタリーの移民で同志の獄中怪死事件の抗議演説会を開いているところを、過激分子として逮捕された（一九二五年）。丁度その頃、州内に強盗殺人が流行していて犯人があがらず、警察への非難が高まっていたところ、警察と検事は偽証者を作りあげて、彼

らをまんまとその犯人に仕立て上げた。裁判では、無罪の証拠がぞくぞく出てきたにもかかわらず、全て握りつぶされた。そして、遂に死刑の判決が下され、再審も却下されたのであった。

このあまりにも不正な階級裁判に対し、救援委員会が世界中に生まれた。ローマ法王さえ助命のためにサインをした。各国の米大使館には抗議のデモが押し寄せ、ときに爆弾が投げこまれるという事態が起こった。また、米国のニューヨークでは一一月以降、マジソンスクエアガーデンでIWW主催の抗議集会が、一万余の人々を集めて連日行なわれるという風であった。山鹿は、米国ボストンにあった防護委員会センターの連絡により、ニュースをアナ系以外の運動団体へも刻々と流し、国内の抗議運動を盛りあげる中心となった。それに呼応した黒色青年連盟および自連系組合は、アメリカ大使館へ押しかけたり、連日各所で、その抗議演説会を開くなど活発に動きまわった。

七月下旬、築地小劇場で黒連主催のサッコ・バンゼッチ釈放要求演説会が開かれた。当夜の演説者の一人であった山鹿は、その夜、他の者に「今日は慎重にやって、臨検の挑発に乗らぬようにしようぜ。今夜つかまると、ぼくはちょっと都合わるい……」と言い、しゃべり終わると演台を下りて便所の方へすたすたと歩いていった。そしてそれっきり山鹿はもどって来なかった。二、三の者に行先を明かしてはいたが、会が終わる頃、もう山鹿は東海道をひた走りに西下する汽車の中にいた。

四回目の上海行

そのころの中国は、一九二三年孫文・ヨッフェの共同声明にはじまる国民党の容共政策によって、孫文の病死（一九二五年）の後も中国共産党との提携が続いていた。そして二六年七月、国民政府は北

方の軍閥勢力を打倒するため、いわゆる北伐を開始した。七月に長沙を、九月に漢口と瀋陽、一〇月に南昌、二七年二月には杭州と破竹の勢いで進撃し、三月にはついに上海に到着したのであった。ところが、上海軍司令官蔣介石は、彼の入城数日前につくられた共産系上海臨時仮政府に対し、四月一二日とつぜん反共クーデターを起こし、共産党員の一斉逮捕をはじめた。このようにして国共合作の蜜月時代はついに破れ、九月には南京と武漢の国民党が南京政府を樹立することによって、蔣介石政権による中小軍閥の掃討と、いわゆる国共の一〇年内戦がはじまったのである。

共産党の勢力の凋落とともに、にわかに抬頭してきたのは、呉稚暉、張継、李石曽、蔡元培など、国民党内部にあった、新しい左派ともいうべきアナキズム系の要人たちであった。そして彼らの後押しによって、アナキズム大学ともいうべき学校を、国民党政府の名で、上海江湾鎮につくることとなった。そこには多分に共産党との思想闘争と各派勢力の均衡上、アナキズムの力をかりようとする蔣介石の下心があり、それ故ひも付きのいろいろな制約を当初から内包するものであった。

さて、一九二七年八月、山鹿のもとへ電報がきた。「山鹿、石川両氏ヲ招ヘイス、スグオ越シマツ、上海江湾労働大学」。これは必修科目としてのエスペラントの講師に山鹿を、西洋社会運動史講座に石川三四郎を依頼してきたもので、しかもその日に在日留学生張易が来訪して、旅費三〇〇円をとどけるという手筈のよさであった。

丁度その頃、前述のようにサッコとバンゼッチの事件が起こり、その無実と救援を訴える集会が連日のように行なわれていたが、山鹿は築地小劇場の講演会で一席ぶったその足で中国へ渡るべく、駅へ駆けつけ列車に飛び乗ったのであった。

——途中で私は、前回と同じように紙屋の番頭に化けた。トランクの中は紙の見本帳、ソロバン、ストック表などを詰めこみ、山福紙店井上記三郎の偽名刺もつくった。横浜・下関・長崎・上海など、どの船着場にも特高らしい男が人垣をつくっていた。年令三〇歳以下の者に目をつけている。すでに手配が出ているらしい。乗船するとまずトランクに目をつけ、怪しいのは甲板のすみに積みあげて、それを探しにきた者の風態をみる。不審となるとすぐ船員室に連れこんで調べるのである。私は席がきまると、すぐソロバンとストック表を開げてパチパチはじいていた。二、三度見まわりにきたが、すぐ通りすぎていった。船が動きだしても、私は船よいのまねをしてめしもろくに食べずにねていた。

国立上海江湾労働大学

——上海揚樹浦に着くと、すばやくタクシーに飛び乗った。約二〇分ばかりで国立労働大学のアーチがみえた。アーチの両柱に「各尽能所」「各取需所」と大書してある。門前の歩哨に来意を告げると、すぐ沈仲九副校長と、早稲田学生当時の旧知、張景が走り出て迎えてくれた。聞くと去る五月に日本を脱出して中国へ渡った岩佐作太郎も、ここの客員教授としてすでに滞在中とのことである。

この労働大学は、日本とドイツで学んだアナキスト、北京大学教授の沈仲九が設立委員長となって、すべて沈のプランでつくられたという。学費はもちろん衣服から小遣いまで支給されていた。国立というので中国全土からえらばれた秀才男女七百人余が集まっていた。

沈は私にこの大学の性格、教育方針、政府との関係などについて話した。とくに二つの敵、つまり共産主義に対しては何よりも唯物弁証法を撃破しなければならぬこと。次いで国民党の、孫文を偶像化し三民主義を題目だけにしている革命の形骸化と闘い、一日も早くアナキスト闘士を養成して、我々の力を拡大しなければならないと、熱情をこめて語った。しかしまた、岩佐などからきくと、当然校長となるべき沈仲九は、複雑な事情のため国民党の文部次官揚培に校長を譲ったりしているほか、学校の開校と共に、政府の干渉が次第につよくなってきているという。そして国民党内にいるアナキスト同志たちをみると、多くはさして富んでいるとは思えないが、さりとて貧しくもなく、女中を使いボーイをもち、ある者は阿片中毒にかかっている有様で、運動にも見るべきものもなく、ほとんどアテにはできない状態とのことであった。つまり国民党を利用して、ほとんどアナキストの手でつくられた労働大学は、その出発の矛盾によってはやくも暗雲をただよわすもののようであった。

事実それについて、労働大学の附近にある立達学園の学生の一人は、「労働大学といいながら、門前には兵営のように兵隊が立番している。出入りは政府役人が監査する。表のアーチに厳として大書されている「能力に応じて働き、必要に応じて取る」という文字が泣くのではないか。政府から給料、学費、生活費をもらうかわりに、教授や職員や学生は、自由を奪われ囚人か兵隊のように束縛されていて、一体アナキズムの学校はどこへいったのか。革命を標榜し自由を表看板とした労働大学が、孫文の肖像を礼拝せよ、三民主義を批判するな、アナーキを説いてはならぬと言う。しかも保守的で非革命的ブルジョア大学のわが立達では、孫文の礼拝はしないし三民主

義の批判でもアナキズムの講義でも何でもできる。兵隊の立番もなく、男女学生の交際も自由である。なんとおかしな対照だろうか」と批判していたのであった。

さて、私は着任の挨拶をするため、大講堂で男女学生七百人の前に立った。沈仲九は「山鹿先生は、一昨年日本のメーデーで、副指揮者として二万人の先頭に立った人である……」と紹介、私は張君を通訳に一時間半ともに革命戦士となろうとしゃべった。ついで各工敵を案内された。印刷、製本、織布、鋳鉄、農場などで、欧文植字室に入るとフレームが一〇ほど並び、ケースは一〇枚ずつはいっている。みんな一勢に私の方を注目する。鉄工敵では兵隊のゴボウ剣を作っていた。ジュータンをつくる工敵は、女学生が棚の上に坐って、染めた毛糸のたまを引いて下に張った図案に従って結びつけて、ハサミで切って模様を表わしていく。印刷敵にはミレーの印刷機が動いていた。騰写版で刷る部屋もあった。

翌日から私はエスペラントのプリントを作って教壇に立った。ところが説明はペキン語を使っても中国全土からきている生徒だから互いに通じない。また、地方によりまるでできない発音があって、カ行はみなチ行になる。LはNに聞こえる。文法や訳はこちらより上達がはやく少しも問題ないが、発音の方が難物でこの点は思いがけぬことだった。しばらくして学芸会があった。同じ物語でも学生が各自の地方の発音でやると、他地方の者には一言もわからないのに、エス語でやらせてみるとみんなにわかる。こんなことからエスペラントの真価が発揮されることになり、大いに流通しはじめた。

日常の食事は、食堂に集まって、教師も生徒も同じ四川菜をとる。大きな皿に山と盛った肉と

野菜は、一皮めくると青赤の唐辛子の煮付けである。その辛いこと辛いこと。ところが二週間もするとすこしも辛くない。丁度その頃おくれて石川三四郎が到着したが、辛くてたべられないと悲鳴をあげた。それで私もいつしか馴れてしまったことに気がついた。

国際工団主義のために

――江湾鎮は曲折した石だたみの古い町である。朝は買物の百姓と魚屋で混雑している。宗門という看板の、赤い布を下げた店が回教徒の食堂で、牛豚の代わりに羊肉を食わせる。店頭の羊の屍体から血を吸っている人もある。豆腐は硬くて藁を通してぶらさげて歩く。水のひいた田を掘り返すと、どじょう、なまず、貝が泥の中で冬眠していて、いくらでも拾える。

上海へはバスで出るが、市の周辺は日本兵が歩哨に立っていてバリケードがはられ、夜は通さない。日本の憲兵特務機関が張りめぐらしたスパイ網はものすごいもので、その動きは言語に絶し、日本の侵略前線の様相がひしひしと感じられた。ある真夜中のこと、学内が騒がしいので眼がさめた。こちらでもがたがた、あちらでもざわざわしている。走る者、かん高い声などが聞こえる。よほどの騒ぎが持ち上がったものと思われた。そしてその騒ぎがなかなか鎮まらなかった。翌朝になってわかったことは、七、八名の共産主義者が捕まったとのことであった。張景君は、「学生中に共産党員がいるならば自分が調べる。兵隊の干渉はいらぬ」と頑張ったが、どうにもならなかった、とすこぶる緊張し悲憤していた。私は各寄宿舎に数個の学生の会合をもっていた。もちろん何でもない集まりではあるが、なんとかものにしたいつもりではいた。しかし私た

ちアナキストグループも、しだいに行動に注意しなければならなくなってきた。今日は他人の身、あすはわが身と思わせられる気配もないではなかった。

それから暫らくして上海の日本人経営印刷工場がストライキに入ったという報をうけた。上海印刷工組合はアナキスト系で、私はすぐ闘争本部へ応援にいった。話を聞くと、この前のストには日本から工員をよんでスト破りをやったという。私は張景君の通訳で、争議団員の前で激励演説をやった。それは、労働者インターナショナリズムを訴え、国際工団主義実現のため、日本の印刷工組合に連絡して、スト破りをさせぬということを誓約するものであった。

翌日の中国系新聞は、この演説内容をデカデカと載せた。それは現地の人々に大きな反響をもたらした。日本の出先機関はもとより、中国政府当局にもはっきり目をつけられるようになった。在上海日本人経営者協会は、「山鹿を生かして上海から帰さぬと宣告する」などの恐喝を加えてきた。ひいてはそれが労働大学に及ぶおそれも生じてきた。

丁度そのころ、エスペランチストで社会学者陳声樹が教授陣に加わり、また九州大学医学部出身のエスペランチスト、旧知の祝振剛が校医となってエスペラント講師陣も充実してきた。そこで彼らにあとを託して、一九二八年(昭和三年)一月山鹿は労働大学講師を長期休暇の名目でやめ、日本へ帰ってきた。先に石川三四郎も帰日していた。岩佐はいよいよ蔣介石の支配介入が強まるばかりなので、当時上海にいた赤川啓来とともに南方アモイの民団訓練所へと立ち去った。まもなく沈仲九も副校長を辞し、日本へ立ち寄ってからドイツへと遊学した。労働大学は国民党の管理下でアナキズムの傾向を一掃される方向へとすすむことになった。(労働大学のその後は、一九三二年上海事変に際して労

働大学部隊として日本の陸戦隊と果敢に闘って勇名をはせたが、砲撃され焼き払われると共に五ケ年余の歴史をとじることとなった。なお、江湾でアナキズム書店を開いていた師復の弟子佩剛と無為夫婦は、事変後行方がわからなくなった。張景は故郷雲南へ引き揚げたといわれている。)

脱走兵赤川啓来

赤川啓来は、信友会出の欧文植字工であった。一九二六年(大正一五年)一月、徴兵されて宇都宮五九歩兵連隊に入営した。そして、丁度一ヵ月目の二月一一日、紀元節の演習見学に引率されて始めて営外に出た機会に、脱走したのである。

彼の父と弟は、その頃大井町に住んでいて、山鹿の家のすぐ近くだった。その日、山鹿の妻ミカが台所でごとごとしていると、突然、和服姿の赤川がのっそりと入ってきた。「赤川さん、あなたは……」と言うミカの声を押えるように、手で合図をする。祝日で家にいた山鹿が話を聞くと、赤羽の友人宅に寄って着物を借り、まず目立つ軍服を脱いだ。それからゴボー剣、軍隊手帳、軍服などを一切つつんだ風呂敷包みを、来る途中国電の網棚に放りあげて来たというのである。「支那へでも逃げたい」と言ったが、山鹿は捨てた軍服、軍隊手帳ですぐ手がまわる、と思った。こんなところにいてはアブナイ。「すぐ隠れろ」とせきたてて信友会の高田公三のところへ移した。案の定、その包みを盗んだ奴が、上野で開いてみて驚き線路端に捨てて逃げ、それが交番に届けられて——ということで、入れちがいに巡査と憲兵がやって来た。

支那へ行かせるにも、隠れているのにもまず第一は金である。といって自分に金はない。山鹿は信

友会の会計梅本に事情を話した。「仕方がない、金庫から盗んでいけ」と言うので、六〇円を取り出して赤川に渡した。一方、上海の白山武(王文成)に「キミノ外套ヲ送ル」と電報を打った。これは、かねてから打ち合せておいた暗号だった。そして「この男が君の外套だ」という伝言を赤川に教えた。赤川は、神戸まで西下して一、二ヵ月ほとぼりをさまし、憲兵が見張るなかを神戸港からひそかに乗船、上海へと向った。そして「ブジ外套ツイタ」という返電を山鹿が受け取ったのは、メーデー前後の頃だった。

上海での赤川は、衛恵林や鄧夢仙などの世話になりながら、あちこちを転々とし、中国の同志に入り混って暮した。一九二七年、赤川は梁竜光に同行してアモイへ行くことになった。労働大学をやめた岩佐作太郎も一緒であった。梁はアモイの豪商の一族で、日本に留学したこともあるシンパであった。アモイについた赤川と岩佐は、そこから徒歩で二キロ、福建省にある民団訓練所に赴き、そこで滞在することになった。民団訓練所は、アナキズムによる闘士を養成する共同生活集団で、軍官学校とコンミューンの内容をもっていたのである。

当時福建省は、地許軍閥李深済の率いる海軍と国民政府の一一路軍が勢力を競っており、その間にあって民団訓練所は、泉州を中心に民団を組織し、着々とその影響をひろげていた。もっとも訓練所の生活者は百人に足らず、その軍隊も三百人を出なかった。装備に至っては小銃さえ士官の数ほどもない状況なのであった。しかし生徒達は、到るところに遠征して、民団の必要を説き組織をひろげていた。泉州の知事や裁判官のごときは、難題の解決には一一路軍にも海軍にも謀らず、民団訓練所にもってくるようにすらなった。人民も家庭争議から豚の児を盗まれた処置までをも持ち込み、商業組

合も訓練所に信頼を寄せるという風であった。民団訓練所の中心人物は、泰望山氏で、朝鮮人の李海観、李有観兄弟が少壮だが参謀少将として人望を集めていた。やがて赤川は、軍官学校の訓練と活動をうけて卒業し、李参謀を助けて活動し始めた。しかしこの状況は、間もなく破れる時がきた。共産軍が勢力を増して福建省をおびやかしたので、突然一一路軍が撤退をはじめたからである。

もとより民団訓練所の存在は、一一路軍にも地許軍閥にも好ましいものでなく、ただ三者の均衡の上に成立していたのである。その均衡が崩れるや否や、まだ軍事力の微少な民団訓練所は、李軍閥に一撃されるのはわかりきっていた。民団訓練所はそこで一一路軍と同時にアモイへ総退却することにしたが、アモイの官憲は訓練所軍の上陸を許可しない。やむなく航行をつづけて某地に上陸、そこで二隊に別れ、本隊は兵士を引き連れて山岳地帯に立てこもって泉州帰還の期をねらうことにし、他は解散して自由行動をとり、待機することに決まった。李有観は上海で活動するというので、彼と同行して赤川も再び上海へ戻った。

赤川が日本領事館警察に逮捕されたのは、それから一カ月ほどたってである。丁度その時、上海へ来ていたアナキスト平山某が捕えられるということがあった。その差入れのために、赤川は東京からやってきていた印度人某（日本名山本）を使った。ところが彼は領事館警察に買収されて密告し、赤川はベビーガーデンにいるところをあっけなく取り押えられた。たちまち脱走兵であることが発覚し、日本へ送還されて代々木の衛戒監獄へ入れられた。その護送途中、京都を通過する時にみた、天皇即位の御大典の提灯があざやかであったと言う。それは二八年一一月のことであった。軍法会議の判決は逃亡罪で二年。その裁判で赤川は、「おれはサンジカリストだ。せっかく日本軍隊に入ったのに、

戦争がなくて退屈千万だったので、支那へいって戦争をやってきたのだ。兵隊が戦争したのがなぜ悪い」と居直って軍人裁判官をけむにまいたが、そのためにベルトや麻縄でしたたか殴られた。二年間、独房で作業衣のミシンがけをさせられて出獄後、あらためて一年兵役をつとめ、ようやく一等兵になってシャバへ出た時、彼は二七歳になっていた。

× × ×

この赤川と同時代の上海の日本人仲間に武良二や、やはり山鹿の手引で渡支した芝浦労組の谷田部などがいた。山鹿は谷田部のことを次のように書いている。

――谷田部君は製罐工で、自連のエス語講習会で、エス語を完全にマスターした努力家の一人だった。ストの時に暴れたことから、警察に追われ、中国へ亡命した。上海で中国の婦人と結婚、その後福建省に移った。彼は生来器用だったので、福建省の田舎で錆ついていた製糖工場を独力で修繕し、それを運転させて農民に喜ばれ、人望を集めていたという。その後動乱と共に、妻の弟がいるジャワへ渡り、楊世民（ヤン・シーミン）と名乗って土着、戦後まで連絡がとれていた。